

## 国際民主婦人連盟書記局時代：思い出することなど

齋藤 瑛子

当時東ベルリンに本拠があった国際民主婦人連盟（以下、国際民婦連）に私が赴任したのは1958年4月末日、それから1964年4月までの6年間、多くの国々の女性問題や運動に多くを学び、とりわけ、そこで親しくなった世界各国の活動家たちとの触れ合いは貴重な体験だった。

1954年3月の「ピキニ・福竜丸事件」を契機に日本で原水爆反対運動が盛り上がり、翌1955年8月に第一回世界原水爆禁止大会が広島で開催された。大会準備の一環として、通訳・翻訳陣を急遽養成する必要があり、東京外大、津田塾大学、東京女子大、早大など、都内のいくつかの大学に声がかかった。当時津田塾大学に在学中だった私や数人の仲間たちが、学んだ外国語（私自身は英語とフランス語）を“世の中の役に立つこと”に活かせる絶好のチャンスと応募し、数週間の特訓を受けたのだった。特訓の講師は国際労働運動の専門家で、その後、関東学院大学の教授になった風間龍先生だった。

私は大会に参加したポーランドの物理学者 N 教授と国会議員で同時に国際民婦連を代表した W 女史の接待兼通訳をまかされた。数千人が会場を埋めた大会で核兵器の危険を訴える N 教授の挨拶を壇上で原稿なしの逐次通訳をさせられたときは、まさに眼の前真っ暗。終っての大拍手でホッとしたときは、8月の暑さもさることながら、汗びっしょりだった。私が国際民婦連のことをはじめて詳しく知ったのは、W 女史の大会でのスピーチや、この機会に交わされた彼女との会話などを通してだった。

長崎で開かれた第二回原水爆禁止世界大会にも、前年に引き続き、今回私は主に翻訳の仕事に仲間たちとともに再度ボランティアで参加した。学業のかたわら、そのころ盛り上がりを見せた母親大会などにも「母親でもないのに」などとボーイフレンドにいわれながらも参加し、日本各地のお母さんたちが当面している困難や活動の報告に時には憤慨、時には深い感動を覚えたりした。こうしたなかで、国際民婦連と協力関係にあった日本婦人連合会（以下、婦団連）のことも知るようになり、当時の名誉会長だった平塚らいてうさんを藤沢の自宅に訪ねたことなどもあった。

婦団連が1957年に正式加盟した国際民婦連の書記局から、英語あるいはフランス語ができる適任者を派遣するよう重ねての要請があり、津田塾大学を卒業し、当時の東京教育大学（筑波大学の前身）英米文学科大学院で比較文学の勉強を続けていた私に白羽の矢がたったのだった。主な推薦者は風間龍先生だった。いよいよ出発が近くなってきたころ、私の母と日本女子大学の同窓・先輩で、東京・鷺宮の近所に住んでいた榎田ふきさんに喚ばれ

「知識はあっても実際運動の経験に乏しいあなたが、国際的な民主婦人運動の大舞台に飛び込んでいくのだから、謙虚に多くを学びとりなさい」と叱咤激励された。

こうして東京は羽田空港からエア・フランス航空で、当時日本とは国交のなかったドイツ民主共和国（以下、東独）の首都東ベルリンへと向かった。まず、南回りのプロペラ機が故障してカラチで不時着と度肝を抜かれて、無事パリに着くと、空港ではエア・フランスでアルバイトをしているという日本人留学生が出迎えてくれ、ソルボンヌ大学近くのホテルに旅の荷をおろした。翌日、訪れたフランス婦人同盟のMさんから、私の東独入国ビザを取得するまで待ってくださいと伝えられ、思いがけなく数日をパリ探索で過ごすことになった。

Mさんは、夫妻でパリ見物に誘いだしてくれたり、夕食に招いてくれたりと、とても親切だった。そして、フランス語の単語まじりの英語で国際民婦連やそこで中心的役割を担っているというフランス婦人同盟の歴史や活動について懇切に話してくれた。「いまベルリンの書記局には、私たちのマリークロードさんが行ってるけど、彼女はね、英語もドイツ語も完璧だから、ベルリンではあなたも言葉の心配は全然ないわ」と勇気づけてくれるのだった。フランス婦人同盟がベルリンに派遣したマリークロード・ヴァイアン・クーチュリエさんは、若かりしころ、ドイツのドレスデン美術大学で絵画とドイツ語を学び、すでにそのドイツ留学時代にファシズム台頭の危機を身をもって実感し、フランスに帰ってきてからは反ファシズム運動、第二次大戦中はレジスタンスに参加し、アウシュビッツ強制収容所に連行され、数少ない生還者として、戦後は一貫して反戦・平和そして婦人運動に参加しているということも、M夫妻が語ってくれたのだった。

まもなく5月というのに肌寒く、冬の名残りがあたりにこびりついているような東ベルリンに着いたのは、それから数日後のことだった。こうして、私の国際民婦連書記局での毎日が始まった。

ソ連や中国など当時の社会主義国からの代表たちはそれぞれの大使館近くに住んでいたが、他の世界各国から派遣されてきていた私自身を含む大半の人たちは、東ベルリンのオランケ通りのそれぞれ庭付き邸宅数軒の部屋を割り当てられた。ドイツ敗戦以前、2階あるいは3階建てのこれらの立派な住宅にはナチ将校の家族が住んでいたが、東独時代になって没収、国営となり、民婦連に提供された、と聞いた。私はオランケ通り21番地1階の大きな一部屋に落ち着き、他の部屋に住んでいたインドのギタさん、バニさんと、キッチン、バス、トイレは共同使用ということになった。そこから東ベルリンの目抜き通りウンターデンリンデン13番地の書記局までは、毎日専用バスや乗用車で送り迎えのある日常で、東独の労働法に基づき、週日は朝7時45分から午後4時45分の8時間勤務で、給与も東独マルクで毎月支給された。週末には広い芝生のある庭に世界のさまざまな国の女性たちが集まって、お国自慢の料理や歌を披露したり、それぞれの国の政情や世界情勢を議論したり、時には個人的な問題などにも及ぶなど、この共同生活は私にとっての生きた国際体験だった。いつだったか、だれでもが知っていた“チャオベラ”をみんなで歌っ

ていたとき、イタリアのジザさんが両手をあげて「パルチザン闘争のこの歌を流行歌みたいに歌うのはやめてほしい！」とさえぎったりしたことなどもあった。ジザさんはミラノの音楽大学の教授だったが、反ファシズム・パルチザンに加わり、戦後は国会議員にも選ばれ、ブロンド髪をアップに束ねた貴族風のとても優雅な女性だった。

ウンターデンリンデン通り 13 番は、黒い鉄門が重々しい豪壮な石造建物で、東西ベルリン分割以前はドイツ銀行本店だったと教えられた。中に入り、幅ひろい石段をあがって、その 3 階と 4 階を書記局が占めていた。3 階には昔はドイツ銀行頭取の執務室だったらしい書記長の大きな部屋につづいて、長い廊下を挟んで 20 ほどもある部屋は、各国からの書記や私のような協力者のための仕事部屋、それに、世界の女性事情や運動にかんする資料・文献室などがあった。4 階には専用食堂、事務室、月刊機関誌『全世界の婦人』編集部、通訳・翻訳陣の仕事部屋などがあった。さらに専用の印刷施設もあり、多少の変動はあったが、50~60 人ほどが書記局の仕事に携わっていた。

期待と一抹の不安を抱きながらの国際民婦連での第一日目、まず見上げるほど上背のある書記長のカルメン・ザンティさんが迎えてくれ、マリークロードさんが両手をひろげ、満面の笑みをたたえて近寄ってきた。30 平米ほどの立派な書記長室の革張りソファーに招きいられ、あなたが日本からの最初の方で、とても若いのがとりわけうれしい、と、ひとは早口のフランス語、もうひとはフランス語なまりの英語で、異口同音に歓迎してくれた。

その後、マリークロードさんは、1956 年夏、日本の原水爆禁止世界大会と日本母親大会に参加して感銘をうけた体験を語り、私がある時、“裏方”として関わっていたことを伝えると、殊の外、喜んだ。「最近の日本はどうか、私たちヨーロッパ人とは違い、遠い日本を離れて、いろいろ不便もあるでしょう。でも、ここではみんな理想というか目的をとるに分かりあう仲間たちですから、安心して、だんだん慣れるように、ね」と立ちあがり、私は痩せぎすで背の高い彼女の胸元にうずまってしまった。その頃、彼女は同年 6 月にウイーンで開催予定の国際民婦連大会準備などのため、書記局に滞在していたのだった。

書記局では、みんな苗字ではなくファーストネームで呼び合うのが日常で、この時から互いにマリークロード、エイコということになった。あとで知ったのは、これはレジスタンス時代からの習慣ということだった。

マリークロードが私に強烈な印象を残したのは、袖をたくし上げたブラウスの腕の内側に入れ墨された囚人番号をあえて見せるわけでも隠すわけでもなく、しら茶けて薄い髪をひつつめにし、知性そのものの広い額に黒っぽい大きな瞳を輝かせながら、さっそうとした姿だった。そしてある時、語ってくれた。1943 年 1 月、反ナチ抵抗運動に参加していたフランス女性たち 230 人が、アウシュビッツ強制収容所に連行され、残酷・悲惨にさらされた時、彼女たちの口をついてでてきたのは“ラ・マルセイエーズ”だった、だが、生き残れたのは僅かだった、と。その淡々と穏やかながら、胸深く怒りをこめた語り口は忘

れがたい。

早くも終戦直後の1945年11月、パリで国際民婦連が創設された時も、ファシズムの徹底的壊滅、平和の確保こそが、とりわけ女性と子どもたちの将来に不可欠との信念から、積極的に参加した。

これもあとで知ったことだが、戦後いち早くフランスの憲法制定国民議会の代議員に選出されたマリークロードは、1946年1月、ナチス主要戦犯を裁くニュルンベルク国際軍事裁判の法廷に証人として出席し、アウシュビッツ強制収容所での虐待、殺害、非行などの生々しい体験を証言した。戦後は、フランス国会議員、一時は国会副議長としても活躍したが、彼女がもっとも心血をそそいだのは、ナチ時代の自らの体験を、とりわけフランスの次世代の若者たちに語りつぐことであり、彼女のモットーは“La vie est a nous” —いのちはわたしたちのもの—だった。

マリークロードのことが長くなってしまったが、私には、彼女が国際民婦連創設の理念—平和なくして女性の権利・平等はなく、女性の権利・平等なくして民主主義はない、子どもたちの生命・生活擁護は女性の義務であり、こうした目標を世界の広汎な女性の協働・連帯を通して実現すること—の体現者と映ったから、だ。

私の赴任当時、書記長だったカルメン・ザンティさん（イタリア婦人同盟）は、カトリック神学教授の夫君同伴だったが、やはり二人とも、イタリアの反ファシズム・パルチザン—この運動には共産党、社会党を中心とする左翼のみならず、カトリック信者、良心的知識人など女性を含む広汎な市民層が参加した—だったと聞いた。

ベルリンの書記局は、執行局や評議会、大会などで選出された書記長・書記、それに私のように加盟組織から随時派遣されてきて、大抵の場合、2～3年で交代する協力者で成り立っていた。書記長と書記の会議は週一回あり、協力者も参加できる全体集会是、緊急用件がなければ、毎月一度は開かれ、国際民婦連や加盟組織の活動現状や問題点などが報告された。例えば、1958年6月に開催予定だった国際民婦連第四回大会には、加盟組織だけではなく、その主旨に賛同する他の幅広い各国・国際女性団体の参加を促すため、正式名称を「ウイーン世界婦人集会」とする経緯・意義などについての説明会が、私にとっての最初の全体集会だった。決定権があるのは書記のレ



1958年7月ウイーン世界大会の後、書記局を訪れた小笠原貞子さん（後列左端：婦団連・日本）が参加した書記局全体会議を終えて。

ベルまでで、協力者たちはそのための資料を提供したり、世界各国の女性団体などから送られてくるレポートをまとめたりする立場だった。

私が赴任した当初の書記局には、広報・文書委員会に並んで、大陸別委員会があり、ここでは責任者の書記に協力者たちが加わった。例えば、当時のアジア・アフリカ委員会は、書記の中国とインド、協力者としてはインドネシア、日本、イラク、ヨルダン、レバノン、南アフリカなどからだった。当面する問題や課題があまりにも多岐にわたる、この広大な地域を一つの委員会で取り扱うことはむずかしく、具体的な問題に関しては、意見の相違や、まとまらないことも多かった。結局、多くの場合、アジアのことはアジアの、アフリカのことはアフリカの人たちが決めるようになった。

それから3~4年たったころだったと記憶するが、書記局は、地域別ではなく、テーマ別委員会に再編成され、女性問題、子ども問題、平和問題の各委員会となった。私自身は、広報・文書委員会と女性問題委員会に加わった。広報・文書委員会では、資料・文献室にある多くの国々の女性問題・運動に関する膨大な紙の山を、国別、あるいは、大陸、地域別に整理、分析し、コメントを加えて記事にまとめ、隔週編集・発行されていた国際民婦連の『インフォメーション・ビュレティン』に掲載したりした。女性問題委員会では、主に日本における女性の地位や差別問題、母親運動などに関する情報、婦団連の活動や提案してくる意見・事項などを英訳して書記に提示したりが主な役目だった。他の大陸や国々の女性問題や女性運動史に関して、この委員会で学んだことも多々あった。とりわけ、アジア・アフリカ諸国では、植民地支配からの民族独立運動への参加・貢献のなかから、多くの女性運動の活動家や、政治的指導者が輩出していたことには瞠目の思いだった。独立後は国会議員などとして国際民婦連でも民族独立や女性の権利・平等のために積極的に活躍し、英語やフランス語など植民宗主国の言語を武器に雄弁に論じる彼女らの姿は時として感動的でした。同時に、そうした歴史的プロセスを経ていない日本女性の地位の相対的低さをも思い知らされた。

私と同じ時期に在任していたのは、入れ替わりもあり、数か月、あるいは、1~2年をともしただけの人々も多いが、思い出せるかぎりでは、以下の国々からだった。私の任期が例外的に6年にも及んだ主な理由は、適当な後任が見つからなかったから、だった。

アジア：中国、インド、インドネシア、日本

アフリカ：南アフリカ、カメルーン

中東：イラク、ヨルダン、レバノン、イラン

アメリカ：米国、キューバ、ブラジル、チリ、アルゼンチン

ヨーロッパ：フランス、イタリア、スペイン、オランダ、スウェーデン、ソ連、  
チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、西独、東独

加えて、通訳・翻訳陣は、主に東独・東ベルリン在住のドイツ女性たちだったが、フランス、スペイン、英国、オーストラリア、ソ連、ブルガリア、カナダ、クエートなどから



の女性たちも多く、ヨルダン、スペイン、カナダなどからの男性も数人で、各レベルの集会・会議の文書の翻訳や通訳、月刊誌『全世界の婦人』などの出版物の数か国語の翻訳などにたずさわっていた。

こうした国々からの人々のなかには、イランやスペインなど、自国の反動・ファシスト政権の迫害・弾圧の下、国外亡命を余儀なくされていた場合も多かった。

ベルリンで共に過ごした、こうした国々からの何人かの姿が鮮明に思い出される。

中国のウーさん — 声の優しい小柄ではあったが、どこか背筋をピンと張っていた彼女とは忘れられないことがある。書記局では一年に何度かドイツ民主婦人同盟の計らいで、東独各地のバス旅行が実施された。ウィーンの大大会も無事終わり、はじめての夏も過ぎた初秋の一日、ナチのブッヘンバルド強制収容所跡の見学旅行があった。バス窓側のウーさんと隣り合わせに座った私には、なごやかな時間が過ぎた。けれども、ヨーロッパ各国の反ナチ約5万6千人もが虐殺された生々しい現場を訪れた後の帰途のバスで、ウーさんは、私に背を向け、窓をじっと見つめたまま、だった。何かに堪えている感じだった。私自身



1958年初夏のころ、住居近くのオランケ湖で。

右端は中国のウーさん。右から3人目筆者。

も気が重かった。そっとウーさんの背を撫でた時、振り向いたウーさんの目は涙に溢れていた。そして言葉少なに語った。息子が射殺されたのは、7つの時、日本兵に、いま生きていれば、21になる、と。返す言葉もなかった。

書記局でのウーさんは、その後も変わらず親切だった。そして1959年早々だったと思うが、お元気でね、と強い握手の手を差し伸べて帰国した。

インドのギタさん — ベルリンの空気が乾燥しているからか、ご自慢の黒髪が洗う度にたくさん抜けてしまうけど、エイコはどう？と、同じ屋根の下で暮らした仲間。後でバニさんが教えてくれたのだが、バラモン階層出身というギタさんは色鮮やかなサリーを身にまとい、その着こなしを教えてくれたりもした。頭脳明晰でインドなまりの英語ながら、核心をついた発言にはいつも刺激をうけた。そんな印象を伝えると「ああ、多分インドの独立運動で大衆に話しかける時に、身につけたのかもしれないわね」との控えめな答えが返ってきた。ある夕刻、彼女の部屋から聞き慣れない声がするので、覗いてみると、ベッドの上にあぐら風に足を組み、一冊の本を手に、涙を浮かべているのだった。問いただした私に答えてくれた。「これは私が最も尊敬し大好きなタゴールの詩集で、朗誦することで、望郷の想いを癒しているのよ」、そして即座にベンガル語から英語に訳してくれた。「多言語国家のインドでは、私たちの全インド婦人連盟の全国大会には英語がわからない参加者

も多く、そういう女性たちにこそ語りかける必要があるのね。だから無償奉仕の通訳を探したりで、とても大変よ。日本にはこんな問題がなくて、いいわね」などと話しながら、激辛カレー料理を教えてくれたりもした。人は如何に生きるべきかなどなど、率直な意見をしてくれたりもした。私にとって“お母さん”のようだったギタさんも、まもなく帰国してしまった。

#### インドネシアのハリアニさん

— 書記局での日々が始まってまもなく、廊下で「あなた、日本からね。いくつ?!」と私は腕をむんずと掴まれ、彼女の部屋に引き込まれてしまった。「24 歳ですが、」すると大柄でたくましいとさえいえるハリアニさんはやや表情をやわらげて語り始めた。「ああ、そう。じゃ、あなたはまだ子どもだった、ね。第二次大戦のとき、

あれは 1942 年ころだったけど、日本軍がやってきて私たちの国を軍事支配したのよね。私たちはそれ以前にも反オランダ独立運動に参加していたけど、同じアジアなのだし、日本が長い間のオランダ支配からの独立を助けてくれると思った。でもこれは大きな錯覚とわかったわ。オランダの強権ほどひどくはなかったけど、それまでのオランダ語でなく日本語を学校で使うようにとか、日本兵がいばりくさって横行闊歩したりとか、だったわ。そこで覚えた日本語の『馬鹿野郎!』って、仲間たちと物陰から大声で叫んで逃げ回ったりしたのよ」もう一人のもの静かなスラムさんは無言のままこの場面を見つめていた。日本の過去を生々しく思い知らされたことだった。

1958 年メーデーのデモに参加。東ベルリン。右から、インドネシアのハリアニさん、インドのパニさん、筆者、インドのギタさん、通訳のアンさん



イラクのハンナさん — ショートカットでキビキビと長い廊下を往き来しながら「国内で共産党や民主的運動を弾圧し、女性を抑圧しているバース党政権と、国益優先で友好関係を重視しているソ連や東独のやりかたには憤懣を感じる!」といつも怒っていた。そんなわけか、まもなく書記局を去っていった。帰国後は非合法の地下活動に潜入したと聞いたが、その後の消息はわからない。

ヨルダンのライラさん — 豊満で典型的アラブ美人の彼女はとても情熱的で、同時に、事と次第によっては極めて理性的だった。例えば、イスラエルをめぐる国際民婦連内での対応は微妙で一様にはいかず、ときには剣呑な雰囲気にもなった。反イスラエル=反ユダヤだとして、イスラエルとアラブ諸国との紛争に関して、イスラエル政府の政策を真っ向から非難するのは不適と主張する人々がいたからだった。これに対し、彼女は「国際民婦連の使命は、どこかの政府の政策を代弁することではなく、具体的に中東で何が起きているのかの現実を世界に知らせること、中東戦争によって悲惨・辛苦の犠牲となっている

弱者にたいする連帯活動こそが必要不可欠だし、イスラエルでもアラブ諸国でも差別や貧困に苦しむ女性や子どもたちが、多くの共通の困難や問題を抱えている、という、そのことをこそ取りあげるべきではないでしょうか」と発言したりしていた。首都アンマンで開業医だった夫君は、パレスチナ解放戦線を支持したり、パレスチナ難民の無料医療手当を組織したりしたが、ヨルダン政府の追及を受け、行方不明とのことだった。週末には庭の塀ごしに茂るぶどうの葉を摘んでひき肉をつつんだアラブの手料理などをみんなにごちそうしてくれたりしたものだだった。

イランのシャナツツさん — 情熱的な詩人で詩集を数冊自費出版したこともあると語っていた。市民的自由、女性の権利・平等の運動を組織するなかで秘密警察に追跡され、着の身着のまま、イラン国の旅券もなしに幼い娘を連れて東独に亡命してきていたのだだった。イランの婦人組織も国内での活動は禁止・弾圧されていたが、ヨーロッパのいくつかの国で連絡ルートをもっていると語っていた。東独は世界各国の独裁政権から亡命してきた人々に東独の旅券を発行していたが、彼女もそのひとりだった。ちなみにチリのパチェレット現大統領のピノチェト独裁政権時代の亡命先も東独だった。そして彼女は主に国際民主婦連が1954年に失った国連の諮問機関の地位を取り戻すために得意のフランス語で東奔西走していた。

アルゼンチンのアデラさん — 夫君同伴で、毎朝バスがオランケ通り8番地前に止まると、庭先で大っぴらに抱擁にキス。ところが、やがて二人は帰国早々に離婚した、とあって意外だった。のちにカルメン・ザンティさんの後任書記長でアルゼンチンのローザ・ヤソピッチさんから聞いたところによると、アルゼンチンの社会は、軍部が強固な基盤をもち、民主主義や男女平等の闘いはきびしく、1954年に離婚法ができてから、とりわけ活動的な女性が離婚するケースが多くなった、ということだった。ローザさんも離婚していた。

フランスのセシールさん — 誇り高い典型的フランス女性で、昼食のときは数人のやはりフランスから来ていた通訳・翻訳の人たち、アニー、マドレーヌ、ミシェル、ウゲッテなどなどに囲まれていて、どこか“女親分”といった風情だったが、ソ連からの人たちとはとりわけ親し気にしていた。アジアからの人たちには無関心で冷たいと受けとめられていたが、イラクのハンナさんなどは「彼女は“ソ連の長女”ですものね」などと皮肉たっぷり評していた。

オランダのコーバさん — ずんぐりした小柄で表情のおだやかさが印象的だった。その印象は話を聞くうちに驚きというか、敬意に深められていった。彼女はオランダのある工場で働く労働者で、組合活動にも参加していたが、1930年代の初めころから隣国ドイツで台頭するファシズム反対を仲間とともに組織した。彼女が20歳半ばだった1941年、オランダにドイツ・ナチス軍政が敷かれ、ユダヤ人や反ナチ活動家が逮捕、強制収容所に送り込まれた。彼女が連行されたのは、ドイツ北東のラーベンスブルク女子強制収容所だった。中には乳飲み子を抱えた若い女性もいたが、明日をも知れぬ同じ運命を負う仲間として、



看守の冷酷な監視の目を盗んで、とにかく生き延びる事を誓い合い、互いに助け合った経験はむしろ貴重だった、と話し、腕に刻まれた囚人番号をそっと見せてくれた。過酷な過去のある人だが、大変やさしく、1960年、私に息子が産まれた時には、毛糸の可愛らしいケープを編んでくれたりした。



インドネシア独立記念日に書記局で(一九五八年八月一七日)  
左から、ギタさん(インド)、エディットさん(東独)、  
スラムさん(インドネシア)、ルイーゼさん(チリ)、  
バニさん(インド)、コーバさん(オランダ)、筆者。

スエーデンのモードさん — 結婚とは女性を拘束するしきたり、というのが信条で、近いこともあつたか、東ベルリンとストックホルムの間を度々往復していた。恋人というかパートナーはちゃんとして、スカンジナビアの国では、こんなのは当たり前で、それぞれ経済的精神的に自立したよい関係だと、とても威勢がよかった。当時の私には世界の民主的な女性運動家にはずいぶん変わった人もいるものと、とても斬新で印象に残った。

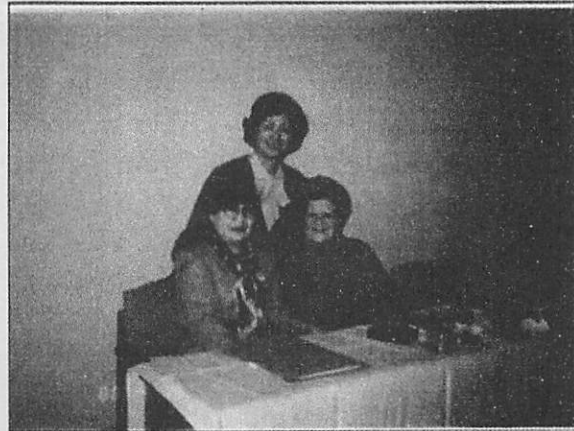
英国のキットさん(写真右端)

— 通訳・翻訳者だった、背の高い、痩せぎすのスポーティーな女性。オレンジ通りの庭で木と木に縄を張り、週末にはバレーボールの試合にみんなを動員したりしていた。ある時、「キットは英国のどこ出身？」と聞いた私に返ってきた断固たる言葉「英国じゃなくて、私はスコットランドから、よ！」そして、そばにいたマーガレットさんが「私はウエールズから！」と胸を張ったのが忘れられない。



ハンガリーのベラさん — 背丈が私とあまり変わらず、華奢な品の良いもの静かな女性で、いつも目立たないけれど趣味のよい身繕いだった。彼女とはよく話し込んだこともあった。「社会主義の国では、女性の権利や平等がすべて実現されたということになっているけれど、たしかに、優れた法律や制度を女性たちが日常生活で体験できる多様な措置や可能性もあるけれど、現実には長い慣習の男性優位はあらゆる分野でまだまだ根強く、家庭内では、とりわけよ。国際民婦連でももっとこうした実態を率直にとりあげては、と思うけど、何か社会主義の国には婦人問題はありませぬ、みたいなのは、どうでしょうね」と繰り返し語っていた。

東独のサビーネさん — 国籍も政治的背景も生活習慣も言語も世代も異なる多様な人々が集まる国際民婦連書記局の大番頭的な存在だった彼女は、1930年代以来の筋金入り反ファシズム闘士だった。非合法活動と逮捕を繰り返し、1937～39年には、スペインの共和国政府を支援する国際義勇軍に参加した。マルセイユからの船旅でバルセローナに上陸し、バレンシアに向かう途次、飛び交う砲弾が耳元すれすれに掠めたこともあった、などと当時のことを話してくれたりもした。気性のはげしい“正義の人”という印象で、書記局の運営が滞ったりした時など「また爆弾が落ちる！」などと怖れられたりもした。



1988年9月、国際民婦連執行局会議に出席した立松隆子さん(左/婦団連)とサビーネさん(右/東独)。真ん中は筆者。ベルリンの書記局会議室で

東独のイルゼさん — 書記局では通訳・翻訳が主な仕事だったが、1933年ヒットラーが政権を掌握し、ユダヤ人迫害の機運が迫る中、ロンドンに亡命した。反ナチ・ドイツ国民戦線に参加した18歳で、初めてロンドンで英語の演説をした時の興奮が今もって忘れられないと何度も語った。とても気さくな人柄で、ユダヤ人独特のユダヤ人自身をからかう冗談や笑い話を披露したりしたものだった。東独での日常について私はずいぶん世話になった。

こうして振り返ってみると、まだまだ多くの“顔ぶれ”が臉に浮かぶが、あらゆる相違にもかかわらず共有していたのは、いみじくもマリークロードさんが語ったように“同じ目的を分かち合う”という基本的な合意、信頼だったのではないだろうか、と思われる。

国際民婦連の書記局では、すべて和気藹々であったかという、そうはいかなかったことも多々あった。それは、それぞれの地域や国の歴史・伝統・国情の違いに加えて、世界



情勢の分析・評価をめぐる加盟組織相互間の意見の相違・対立が、往々にして書記局にも持ち込まれたことに起因していた。国際民婦連創立の理念からもわかるように、特に“平和”をめぐる問題で顕著だった。国際民婦連は「もう二度と再びあのような戦争の悲惨を繰り返してはならない」という歴史の教訓を踏まえて創設されたのだが、これを戦後の対立・抗争・紛争の多極化と南北・貧富の分極化が同時進行する複雑な世界情勢を踏まえて具体的にどのように継承・発展させていくのか、一筋縄ではいかないことを、書記局での日常で直面させられることも一度ならずだった。



1960年4月、国連傘下ジュネーブ軍縮会議に、核軍縮養成のため派遣された国際民婦連代表団。  
左から2人目筆者。中央はカルメン・ザンティ書記長。

私の在任期間は、東西間の冷戦の激化に、中ソ対立の表面化が重なったというむずかしい時代だった。その対立は、東西両陣営の核軍拡競争に並んで、ソ連が1956年にそれまでのいわゆるスターリン主義から平和共存政策に転換し、これに対して中国がアメリカ帝国主義との共存はありえないと批判したことに端を発していた。元はといえば、中ソの共産党間の世界戦略をめぐる理論闘争だったが、1960年代に入ると、両国間の国家利益の正面衝突に発展していった。この対立は国際女性運動にも影響を与えずにはいかず、ソ連の平和共存政策を支持するか、アメリカ帝国主義との平和共存はありえないとする中国の立場に与するか、あるいは、核実験停止条約の評価などをめぐって、多くの加盟団体の間に意見の対立が生じた。“平和”の問題に関しては、第二次大戦後の“反フ

ァシズム”という国際民婦連をつなぎ止めてきた理念だけでは、世界の110数か国の加盟組織全体をまとめることが次第にむずかしくなったのだった。

この対立は書記局の日常にも微妙に及んだ。この頃になると、私は、それまで特に親しかったわけでもないソ連のクセニアさんから自宅の夕食に招かれたり、中国のウーさんの後任のチーさんからも中国大使館主催の映画の夕べや、餃子パーティによべられたりしたことがあった。とりたてて、私の“意見”を直接聞かれたわけではなかったのだが、真意としては、日本の婦団連はどちらなの？あなた個人としてはどうなの？と知りたがっているのだな、と察していた。

国際民婦連が日本の原水爆禁止世界大会や母親大会などに送るメッセージを書記局が準備する内容について、書記でなかった私がそれまでは意見を求められることもあまりなかったが、とりわけ 1961 年にソ連が再開した核実験について、私を送りだしていた婦団連はどうなのか?!と声をかけられるようになった。個人的には正直なところ“きれいな”とか“正義”とかの核実験とそうでないのがあるという議論には違和感を禁じえなかったが、背景にさまざまな“政治勢力”の拮抗があり、私個人は云々、ですまされそうもない状況でもあった。そのころは、今のようなインターネットがあるわけなし、文通の往復にも数週間を要した時代。当の婦団連からはなかなか返信がないままの状態のなかで、神経をすり減らす困惑な月日だった。さらに 1962 年のキューバ危機をめぐって中ソの対立は激化し、“ソ連の冒険主義”を、あるいは“アメリカ帝国主義”を名指して非難するかどうか、でも意見が割れ、妥協をどのレベルまで受け入れるのか、をめぐっても激論され、書記局も何かぎすぎすした雰囲気だった。私は、日本に関する提案や決議など、書記局会議で決められた内容を事後通達として知らされるだけのこともあり、臍に落ちず、官僚的、非民主的と腹を立てて、カルメンさんの執務室に乗り込んでいったことなどもあった。

当時、西ヨーロッパから来ていた仲間たちには、ナチ・ドイツから解放してくれたソ連に対する感謝と負い目が交ざった心情があり、表立ってソ連に反対したり抗議したりするのをいさぎよしとしなかったのではないかと、思わせられる場面が度々あった。興味深いのは、イタリアのジザさんは、書記局の全体集会などで、話し出すと止まらない雄弁で、国際民婦連が、平和共存を支持するかどうかなどを議論する意義はあまりない、核実験はどこの国であれ反対、世界のどこであれ戦争あるいはその危険には抗議すべきではあるが、国際民婦連と加盟団体は、女性の不平等・差別排除、経済的社会的地位の向上の運動を焦点に連帯行動を推進すべきであり、戦時中のイタリアの反ファシズム運動に加わった多様な女性たちが、戦後の幅広い女性運動の高揚に多大な役割を果たしたことを忘れてはならない、と論じていた。後年、イタリア婦人同盟が国際民婦連から脱退し、“友好組織”に留まったとき、ジザさんの発言が思い出されたものだった。

こうした困難な時期、私が直接その場において体験した国際民婦連の大会、執行局、評議会の会議などでは、国際的女性運動として加盟組織の間で妥協点や共通点を見いだすべく真剣な努力が続けられ、時には夜が明けるまで議論が続けられたことも多々あった。そして、少数意見一ちなみに日本からの加盟組織の婦団連は“絶対少数”であったこと一度ならずだったが一は決議などでそれとして採りあげられた。

緊張が和らぐ場面もあった。多分あれは 1963 年のモスクーで開かれた大会の時ではなかったかと思う。全体集会でのアメリカ代表の発言に会場が笑い（一部、苦笑）に包まれたのだった。「どこの国の首脳であれ、他国に対して攻撃的で侵略的な政策を推進するなら、私たちは首相夫人たちに向けて呼び掛けようではありませんか！ギリシャ喜劇、アリストパネスの『女の平和』に倣ってベッドインを拒んでください！」



一九六一年十月アルバニアのティラナでアルバニア婦人同盟全国婦人大会に婦団連会長榎田ふきさん(右から二人目)が民婦連代表として参加した時の繊維工場見学の写真。

1964年4月、私は書記局での任務を終え、引き続き、東ベルリンのフンボルト大学で教鞭をとるようになった後も、1980年代半ばころまで、婦団連の要請に応じ、国際民婦連のさまざまな国際会議などにはできる限り、主に通訳などとして、協力した。

いまこうして半世紀以上も“昔”の日々を振り返りつつ感慨無量の思いである。それは、米ソの核兵器を含む軍拡競争を軸とする冷戦の激化にともなう恒常的な戦争の危険をはらんでいた時代であり、加えて“平和”戦略をめぐる中ソ対立による不幸な時代でもあった。そんな最中であって、国際民婦連が、5大陸の120にも及ぶ加盟組織、そして、他の国際的女性組織とともに、意見の深刻な対立や亀裂にもかかわらず、反戦、平和、言葉の真の意味にもとづく民主主義、女性の権利、そして次世代の幸せを守る運動を世界的に展開した時代でもあった。私の書記局時代は、まさにこうした時代だった。

また、国際民婦連の名称である“民主”が、言葉の真の意味で必ずしも機能しなかった具体例もいろいろあったと記憶する。そうではあるけれど、あるいは、それにもかかわらず、細菌兵器や核兵器などの大量殺戮兵器禁止、女性の差別撤廃に向けてのアピールや行動、特に、北ベトナムへのアメリカの爆撃による破壊や虐殺などに対する抗議、連帯活動など、国際民婦連が世界的レベルの女性運動史に果たした貢献は大きいと思う。

1990年代の東欧社会主義圏の崩壊にともなう冷戦の終焉と、その後の新たな複雑で展望の見えにくい世界情勢は、それまでの国際民婦連の活動に停滞をもたらした。国際民婦連書記局があった東ベルリンのウンターデンリンデン13番地の建物も、ドイツ統一に伴い、再びドイツ銀行本店となり、書記局は退去を余儀なくされた。強力な支援組織だった東独はじめ東欧諸国の加盟組織も改組、あるいは縮小され、フランス女性同盟も女性連帯連合と改称し、女性の権利・平等、国際連帯をその趣意に掲げるなど国際民婦連のとりわけ反戦・平和擁護の歴史と伝統の明確な継承・発展は困難な時代となった。ヨーロッパの地図が塗り替えられた激動の1990年代初頭、ベルリン書記局に保存されていた国際民婦連の出版物や世界女性運動に関する豊富な資料はどうなったのか、分散してしまったという噂



も耳にしたが、確かなことは不明である。

国際民婦連はその後、ひとまず、フランスに拠点を移して再編成を試みたが、2002年以降、ブラジルのサンパウロに再度移転し、創設の精神と伝統の継続を建前として今日にいたっている。

(2015年2月9日、在ベルリン)

追記：

- 1) 現在は“Woman”は“婦人”ではなく、“女性”とするのが適切だが、さまざまな組織や機構、さらに、国名についても、当時一般に通用されていた名称を使用した。
- 2) 正確な名前の記憶が不確かな場合の人物名は、ローマ字の頭文字とした。